

令和3年2月17日

南の風 387

南部地区ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

67対70で明成リード、残り時間35秒です。

米須選手が落ちついてフロントコートにボールを運びます。パスをさばいてリターンをもらい、残り17秒で3P シュートを打ちます。これに対して明成の山内選手がブロックに跳ぶがファウルとなります。米須選手は3本のフリースローを完璧に決め、70対70の同点。残り16.4秒。

明成はタイムアウト。佐藤ヘッドの指示は、残念ながら聞き取れませんでした。時間の使い方、誰がどのように攻めるかの指示と、残り時間のディフェンスのやり方が主な内容だと想像します。

東山ベンチの指示は少し伝わりました。大澤コーチは「ファウルがたまっているから、ファウルは絶対ダメ。苦しみながら、ファウルはしないで守り切ろう。」あとの細かい部分は聞き取れませんでした。

タイムアウトが解け、左側のフロントコートからのスローインです。スローインは山内選手。山崎一渉選手が、左スロットラインのスタックから飛び出してボールを受けます。トップでスクリーンを利用してペイントに進入してジャンプショットを打ちます。外れますが、すぐさま自分でリバウンドに行き、ボールを掴んでステップバックしてシュートします。これが見事に決まります。

残り5秒となり、急ぎたい東山はフロントコートに素早く運び、堀選手が残り1.8秒でシュートするも、ブロックされてタイムアップでした。

最終スコア、70対72でした。

仙台大学附属明成高校は、3年ぶり6度目の優勝を飾りました。

すごいゲームになりました。勝敗がどちらに転ぶか分からない展開でした。

後半にスポット当てて感想を書きます。

あくまで私見です。まずこのゲームのクリティカルモーメントです。クリティカルモーメントとは、ゲームの中で勝敗の分岐点となったワンプレー、もしくはワンシーンを言います。クリティカルモーメントという言葉は、バスケットボール用語ではありません。

平尾 誠二氏（平成28年10月20日逝去。日本代表を約8年間務め、1991年の第2回ワールドカップでは日本の初勝利の原動力となった）が講演会や著書の中で使っていた言葉です。

講演会での平尾氏の話がたいへん印象に残り勉強になったので、私もゲーム後の反省や分析をするときに、活用させてもらっています。

私は東山と明成とのゲームのクリティカルモーメントは、4Qの残り時間4分14秒で、明成10番山内選手が放った3P シュートが決まった瞬間だと思いました。（まだこの時点では62対60では、東山2点リード）です。

根拠は、3Pが決まらずやや悩んでいたと思われる（私は画面を通して感じた）山内選手が、このゲーム初めて3P シュートを決め、ゲームの流れが一気に明成に傾いたと思ったからです。続けてバスカットからのドライブでシュートを沈め、さらに山崎一渉選手の3P シュートへつながりました。1分弱の間に一気に5点差をつけました。 続きは次号にします。